

はじめに

本書の初版本は1996年3月に発刊されました。当時の理事長である熊取敏之は、放射線の健康影響を人々に正しく伝えることの重要性に言及し、専門家は人々の理解を得られるような言葉を用いて、科学的に正しい説明を行えるよう努力すべきだという旨を述べています。その後、1997年11月に第1回目の改訂、2000年11月に第2回目の改訂が行われました。

2011年3月11日に東日本大震災とこれに伴う巨大津波、そしてこれが引きがねとなった東京電力福島第一原子力発電所事故が発生し、広範囲な環境の放射能汚染が起きました。それ以降、放射線の健康影響への人々の関心はこれまでになく高まり、放射線・放射能に関する解説書も次々と出版されています。

こうした背景を踏まえ、このたび、当協会では創立60周年の記念事業のひとつとして、本書を新たに改訂し公開することにしました。本書を制作する際には、当協会内の委員会で原案を作成し、外部の専門家の意見を伺った後、出版編集者の協力を得て一般の方々にわかりやすい表現を模索しました。今回の改訂では、国際機関で共有されている知見と考え方、防護の枠組みに基づいて、客観的事実を記載するようところがけました。また、高線量と低線量の健康影響を分けて記述し、放射線を測定する単位の分かり易い説明を工夫するなど、「放射線の影響について、一般の方々の理解を得られる言葉で解説する」という初版の目的に添いつつ、その後20年間の科学的知見の進歩、放射線利用と防護の考え方の発展の状況を取り入れ、一層理解を深めていただけるように努めました。現在、医療技術の目覚ましい発展・普及に伴い医療関係者や患者の被ばく線量が増加し、その低減が課題となっています。さらに、医療従事者が患者に対して放射線の影響や防護管理について説明する必要性が生ずる場面も増えています。本書が広く読まれることで、医療従事者や医療を受ける方々の間でスムーズな情報伝達が行われることを期待します。

1960年9月に設立された「放射線影響協会」は、公益法人改革により国の認可を得て、2012年4月に「公益財団法人」となりました。公益財団法人には、不特定多数の人々の利益増進に資することが求められています。今回の改訂では、より多くの方々に読んでいただけるように、協会ホームページ上で公開する形をとりました。

本書が放射線の影響について、みなさまの理解をさらに深めていただくことにお役に立てれば幸いです。

公益財団法人 放射線影響協会
理事長 佐々木 康人

「放射線の影響がわかる本」改訂版作成編集委員会

主 査 佐々木 康人 ((公財)放射線影響協会)
委 員 赤羽 恵一 ((国研)量子科学技術研究開発機構)
岩崎 利泰 ((一財)電力中央研究所)
柿沼 志津子 ((国研)量子科学技術研究開発機構)
百瀬 琢磨 ((国研)日本原子力研究開発機構)
吉永 信治 ((国大)広島大学)

原案作成 (公財)放射線影響協会
浅野 智宏、猪飼 正身、金子 正人、三枝 新

編集協力 チーム・パスカル
寒竹 泉美

(敬称略・五十音順)